

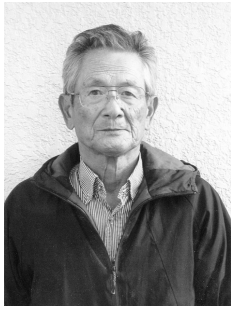


栗みのる

水島 晴子
(兵庫)

このごろの私
夕暮の細道に何かが走り出
て、五メートル程前方で止ま
った。金茶色に褐色で隈取つ
た丸い顔がこちらに向いてい
る。杖を突く私の様子を見て
とると、ニコッと笑って、境
界の土手を駆け下りて去った。

くつきりと根方に影をめぐらして木々は初めの夏をうたへり
舌傷むまで硬き肉噛みあへず目を遣る花圃にとりどりの彩
葦とふ字を忘れさう 幾たびも手のひらに書く葦よすみれ
丹精の弁当持たせ箸添ふるをわすれぬしとぞ亡き姉のこと
善き友の初任地たりし西伊豆の町にあふるる濁流を映す
新卒のをんな教師をからかひし分校生らもいぢいさまか
切り放し洗ひ放しのわが髪のがきれいともまた言はれたり
「白髪だけ、褒められるのは」つい言ひて真実なれば沈黙呼びつ
きはまれる暑さのひるを隣人の柩送るとひとらこゑなし
松脂の香を放ちをりみどりなすドイツ唐檜は風のゆふべを
おそ夏の風に触れつつきのふけふ蚊帳吊草は穂をほどきそむ
栗実るころに死にたし毬いがの中なる滋味や栗の実たのし
敷きて臥す片耳のうち補聴器のハウリングとつづくもはや気にせず
下手人と同じグレーのポロシャツで施設の隅で寝起きすけふも
平城宮跡よりへりて搬ばれつ撃たれ死にたる権勢の人



改 葬

佐藤 金治
(東京)

このごろの私
火、木、土、日のテニスで
す。このうち土、日は早朝テ
ニスで四時半起床。日の出を
待ちて高齢者達と六時半スタ
ートです。二時間ほどですが、
何時まで続くかが私の健康の
バロメーターです。

ふるさとの墓の整理に「はやぶさ」で向かふ車内にやや気の重し

「はやぶさ」の窓いつぱいの岩手嶺の雄姿に圧され礼して過ぎぬ

霜月の特急「つがる」の車内には「まいね」が聞こえ昔を偲ぶ

特急は津軽平野を走りゆく窓辺を過ぎるりんごの赤さ

秋晴れに鳶の円描くそらの下読経ひびきて今日墓じまひ

かすみ網しかけて小鳥を追ひし山背にして離る骨壺かかへ

青草のこの土手に山羊遊ばせて日暮れに帰りき小五の夏は

禿頭の友の落語を聞きをりぬ「道楽」名乗ればちかづき難し

三十分の話しの道筋間違はず同年「道楽」先はあかるし

「道楽」の噺、噺の表情を繋ぎて聞けば笑ひ噴き出す

落語終へ江戸のむかしを偲ばせる深川めしに舌鼓うつ

散歩して金木犀の香に気づき歩をとめ嗅ぎぬ朝のご褒美

お墓には樹木葬とふ流行あり「墓」の概念変はりにけりな

迷ひきて改葬さめし新墓地にしみじみと聞く読経のひびき

新墓地はスカイツリーもみえる丘家族でながめ儀式を終へぬ